

ピーマン青枯病抵抗性台木への高接ぎ木による発病抑制技術

ピーマン青枯病抵抗性台木の接ぎ木を、茎部上位(約12cm)で行うことにより、発病抑制の効果を高める栽培技術

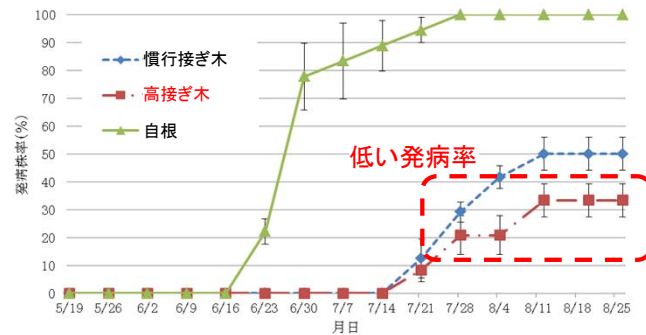
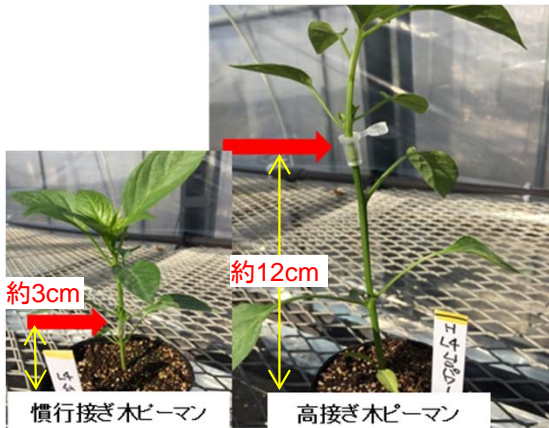
研究開発の背景

- ・夏秋作型のピーマン栽培では、青枯病が発生し、問題となっている。
- ・青枯病の防除技術として、主に抵抗性台木が利用されているが、その防除効果は十分ではないため、青枯病の防除技術の開発が求められている。

研究成果の内容

夏秋作型ピーマンの接ぎ木を茎の上位部で行う、青枯病の発病抑制技術

- ・接ぎ木を、**茎の上位部**(約12cm)で行うことで、慣行の位置(約3cm)に比べて青枯病の**抑制効果が向上**し、自根及び慣行接ぎ木と比べ、**青枯病が発病しにくい**。
- ・夏秋作型の高接ぎ木栽培は、慣行接ぎ木と比べ、**生育収量及び品質が同等**。
- ・青枯病に対する抑制効果は、台木品種に「台助」、「台パワー」、「バギー」などの中～強抵抗性品種を利用した場合に得ることができる。



導入メリット

青枯病の発病率を半減

【8月下旬時点の発病株率】

慣行接ぎ木 : 30%
高接ぎ木 : 15%

山口県の夏秋作型では10a当たり約1,200株を定植しており、収量の増加を30%、高接ぎ木苗の苗代が慣行の1.2倍と仮定すると、**13万円程度の増益**になる(2011年試算)。



期待される効果

- ・土壌くん蒸剤などの化学農薬の使用量の減少により、安心、安全な生産物を供給することができる。
- ・農産物の安定生産、農家所得の向上、国内外の産地に対する競争力の強化に大きく貢献する。

導入をオススメする対象
夏秋型ピーマン栽培で青枯病が問題となっている地域

開発機関: 山口県農林総合技術センター、農研機構中央農研センター、ベルグアース(株) 予算区分【競争的資金】